

桂枝茯苓丸

『金匱要略』

婦人妊娠病脈証并治第二十

第2条 婦人宿有癥病，經断未及三月，而得漏下不止，胎動在臍上者，為癥瘕害。妊娠六月動者，前三月經水利時，胎也。下血者，後断三月衃也。所以血不止者，其癥不去故也，当下其癥，桂枝茯苓丸主之。

方 桂枝 茯苓 牡丹去心 桃仁去皮尖熬 芍藥各等分

右五味，末之，煉蜜和丸如兔屎大，每日食前服一丸，不知，加至三丸。

婦人妊娠病脈証并治第二十

第2条 婦人宿有癥病，經断未及三月，而得漏下不止，胎動在臍上者，為癥瘕害。妊娠六月動者，前三月經水利時，胎也。下血者，後断三月衃也。所以血不止者，其癥不去故也，当下其癥，桂枝茯苓丸主之。

「婦人でもともと癥病（腹中に腫塊がある）がある人の月経が止まって、3カ月も経ないうちに、また不正出血が続く。さらに臍上で胎動のように感じるのは、癥病のせいで妊娠ではない。もし、妊娠する前の3カ月間の月経が正常で、月経停止後6カ月で胎動があれば、妊娠である。不正出血が続いていたのに、その後3カ月、月経が停止しているのは衃（腹中の凝血）である。不正出血が止まらないのは、癥のためである。桂枝茯苓丸がその癥を下すのを主治する」

〔参考〕『医宗金鑑』

「経断有孕，名曰妊娠。妊娠下血，則為漏下。婦人宿有癥瘕之疾而育胎者，未及三月而得漏下，下血不止，胎動不安者，此為癥瘕害之也；己及六月而得漏下，下血，胎動不安者，此亦癥瘕害之也。然有血衄成塊者，以前三月經雖断，血未盛，胎尚弱，未可下其癥瘕也。後三月血成衄，胎已強，故主之桂枝茯苓丸，当下其癥瘕也。此示人妊娠有病，当攻病之義也。此条文文義不純，其中必有闕文，姑存其理可也。」

条文解説

この条文は、一般には、癥病と妊娠の鑑別を述べたものという説が多い。胎動を感じるのが臍上となっており、これが癥の1つの根拠となっている。妊娠であれば、胎動は臍下のはずである。

もう一つの説は、癥病をもっている婦人が妊娠したというものである(たとえば『医宗金鑑』)。条文がやや不明確なので、両説とも否定しがたいが、妊娠を伴わない癥病であれば、桂枝茯苓丸のように比較的破血効果の少ない処方ではなく、もっと破血効果の高い虫類薬や軟堅薬等を使用するはずである。したがって、もともと癥病をもつ婦人が妊娠し、癥病によって妊娠が害されるのを防ぐのと、処方によって妊娠を障害しないため、比較的破血効果の少ない桂枝茯苓丸を使用する、というほうが文意は通じると考える。

〔処方解説〕

牡丹皮・桃仁・芍薬：活血化瘀

牡丹皮 辛 行血

芍薬 苦 帰血

桃仁 瘀血を質的に変化させる（虫類に近い）

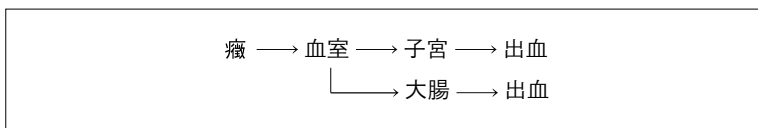
桂皮（枝）：脈外の気を推進し、脈中の血の流れを改善する

茯苓：血中の水をとる，絡中の水をとる，血中の水を動かす

これら5味のうち、桂枝・丹皮は行血，芍薬は帰血，桃仁は血の質的変化に働く。茯苓は、結果的に生じる水を捌く。

癥（腫塊）に対して、治療を行いそれが有効であれば、癥は軟らかくなり、縮小するはずである。つまり、癥の一部は「血に近いもの」と「水」に分解される。この「血に近いもの」と「水」は絡中に入り、処理される。

別の処理の経路としては以下がある。



[茯苓についての補足]

木防已湯証において、桂枝・石膏・木防已・人参で「膈間支飲」に対応する。その処方で効かないときは、石膏を芒硝・茯苓に変えて対応する。これは、痰→飲→水（湿）というように、処方の投与によって、病理産物の質的变化を伴う処理を行い、最終産物である「水」を茯苓で処理している。

同様に、桂枝茯苓丸の投与にて癥が縮小・軟化した場合、その処理された部分は、癥→瘀血＋水に分解され、瘀血に対して桂枝・丹皮・芍薬・桃仁、水に対して茯苓が対応していると考えられる。

枳実芍薬散

『金匱要略』

婦人産後病脈証治第二十一

第5条 産後腹痛，煩満不得臥，枳実芍薬散主之。

枳実焼令黒勿太過 芍薬等分

右二味，杵為散，服方寸匕，日三服，併主癰腫，以麥粥下之。

婦人産後病脈証治第二十一

第5条 産後腹痛，煩満不得臥，枳実芍薬散主之。

……併主癰腫，以麥粥下之。

「産後，腹痛・煩満し，臥することができないものは，枳実芍薬散がこれを主る。

また，癰腫に麥粥で枳実芍薬散を服して有効である」

条文解説

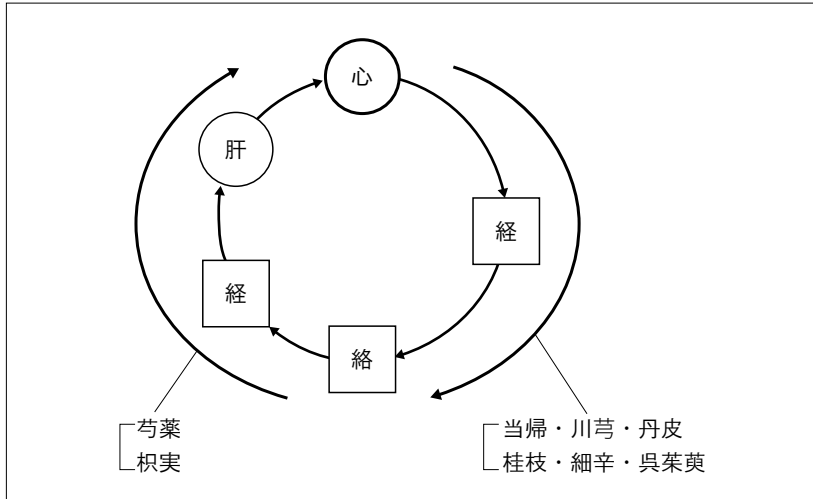
産後，気血が鬱滞して腹痛し，腹が張って苦しく，仰臥位をとれないものは，枳実芍薬散がこれを主る。

[煩満について]

腹中が煩満するという説と，胸中が煩満するという説がある。ここでは，産後，気血の鬱滞による腹部の症状を述べているので，腹中煩満の説をとる。

[処方解説]

枳実を黒くなるまで焼いて使用する。これによって、血中の気を巡らすことができる。処方内容としては、排膿散（枳実十六枚，芍薬六分，桔梗二分）に近い。経方的には，どちらの処方も絡から肝へ血を帰す方向に働き，気血の滞りを治し，腹痛を愈すと考える。



下瘀血湯

『金匱要略』

婦人産後病脈証治第二十一

第6条 師曰、産婦腹痛、法当以枳実芍薬散、仮令不愈者、此為腹中有乾血着臍下、宜下瘀血湯主之、亦主経水不利。

方 大黄二両 桃仁二十枚 蟅虫二十枚熬去足

右三味、末之、煉蜜和為四丸、以酒一升、煎一丸、取八合、頓服之、新血下如豚肝。

婦人産後病脈証治第二十一

第6条 師曰、産婦腹痛、法当以枳実芍薬散、仮令不愈者、此為腹中有乾血着臍下、宜下瘀血湯主之、亦主経水不利。

「師曰く、産婦で腹痛するものは、枳実芍薬散で対応できるが、これが無効のものは、腹中に乾血があり臍下に着しているからである。下瘀血湯がこれを主る。また経水不利も主る」

〈参考〉婦人産後病脈証治第二十一第5条

「産後腹痛、煩満、不得臥、枳実芍薬散主之。」

条文解説

産後の腹痛で、気血の鬱滞によるものは、枳実芍薬散で対応できる。しかし、枳実芍薬散を投与しても腹痛が愈えないものは、気血の鬱滞だけでなく、下腹部に乾血があるからである。下瘀血湯がこれを主る。また経水不利にも効果がある。

[処方解説]

桃仁・麩虫で乾血を溶かし，大黃によって下す。酒で服すことにより，血中に薬を引きこむ。

大黄甘遂湯

『金匱要略』

婦人雜病脈証并治第二十二

第13条 婦人少腹滿，如敦狀，小便微難而不渴，生後者，此為水与血，俱結在血室也，大黄甘遂湯主之。

方 大黄四兩 甘遂二兩 阿膠二兩

右三味，以水三升，煮取一升，頓服之，其血当下。

婦人雜病脈証并治第二十二

第13条 婦人少腹滿，如敦狀，小便微難而不渴，生後者，此為水与血，俱結在血室也，大黄甘遂湯主之。

「婦人で産後，少腹が満して，おわんの如く盛り上がり，小便がやや出にくく，口渴のないものは，水と血が血室に互結したものである。大黄甘遂湯がこれを主る」

条文解説

婦人の少腹脹満には，蓄水証と蓄血証がある。もし小便が自利していれば蓄血証，小便不利で口渴があれば蓄水証である。しかし，この条文は少腹脹満し，おわんの如く盛り上がり，小便はやや難で口渴はない。これより，水と血が血室に結んでいることがわかる。

[処方解説]

甘遂で水を透し，大黄で攻瘀する。阿膠は産後の血を養い，また甘遂・大黄等の峻剤の効果を緩和する。

礬石丸

『金匱要略』

婦人雜病脈証并治第二十二

第15条 婦人經水閉不利，藏堅癖不止，中有乾血，下白物，礬石丸主之。

方 礬石三分燒 杏仁一分

右二味，末之，煉蜜和丸棗核大，内藏中，劇者再内之。

婦人雜病脈証并治第二十二

第15条 婦人經水閉不利，藏堅癖不止，中有乾血，下白物，礬石丸主之。

「婦人で月経が止まって不利し，藏堅癖が止まないのは，中に乾血があるからで，白帯を下す。礬石丸がこれを主る」

条文解説

婦人で月経が止まって来なくなったもので，触れると下腹部に硬い塊があるものは，中に乾血があるからである。そのために，気機が不利し，津液が湿濁に変化し，白帯を下す。礬石丸を膈内に挿入する。

[処方解説]

礬石の酸渋作用によって，白帯を治療する。杏仁は，礬石を丸薬にする際にその油性が必要なので入れている。ただし，膈内に挿入する丸薬であるため応急的に止帯の効果はあっても，腹腔内の乾血の治療はできないので，他の処方が必要となる。

礬石（明礬）：酸・渋・寒。効能：①解毒医瘡・収湿止痒，②渋腸止瀉・
収斂止血，③祛風痰，④清熱退黄（『中医臨床のための中薬学』
神戸中医学研究会）。

『本経』（涅石）：味酸，寒，主寒熱，泄利，白沃，陰蝕，惡瘡，目痛，
堅骨齒。

『別録』：無毒，除固熱在骨髓，去鼻中息肉。

岐伯云「久服傷人骨」

大黄牡丹湯

『金匱要略』

瘡癰腸癰浸淫病脈証并治第十八

第4条 腸癰者，少腹腫痞，按之即痛，如淋，小便自調，時時發熱，自汗出，復惡寒。其脈遲緊者，膿未成，可下之，当有血。脈洪數者，膿已成，不可下也，大黄牡丹湯主之。

方 大黄四兩 牡丹一兩 桃仁五十枚 瓜子半升 芒消三合
右五味，以水六升，煮取一升，去滓，內芒消，再煎沸，頓服之，有膿当下，如無膿当下血。

瘡癰腸癰浸淫病脈証第十八

第4条 腸癰者，少腹腫痞，按之即痛，如淋，小便自調，時時發熱，自汗出，復惡寒。其脈遲緊者，膿未成，可下之，当有血。脈洪數者，膿已成，不可下也，大黄牡丹湯主之。

「腸癰の人は、少腹が腫れて痞硬し、按ずると淋病のように痛むが、小便は正常なので、淋病は否定される。熱の軽重はあるが、常に發熱があり、汗が出て、惡寒する。その脈が遅緊のものは、膿未成なのでこれを下すべきである。大黄牡丹湯を投与後、下血するはずである。脈が洪数のものは、すでに化膿しているので下してはならない」

〈参考〉調胃承氣湯：大黄四兩，甘草二兩炙，芒硝半升

頓服，或少々温服

大陷胸湯：大黄六兩，芒硝一升，甘遂一錢匕

分二服用

薏苡附子敗醬散：薏苡仁十分，附子二分，敗醬五分

右三味，杵為末，取方寸匕，以水二升，煎減半，頓服。小便当下

腸癰之為病，其身甲錯，腹皮急，按之濡如腫狀，腹無癢聚，身無熱，脈數，此為腹内有癰膿，薏苡附子敗醬散主之。

『大漢和辞典』

時時：ときどき，ときおり。また，その時その時に。また，いつも，常に。

時時刻刻：毎時毎刻，たえず，不断

〈参考〉肺痿肺癰欬嗽上気病脈証治第七第2条

問曰，病欬逆，脈之，何以知此為肺癰。当有膿血，吐之則死，其脈何類。

師曰，寸口脈微而數，微則為風，數則為熱，微則汗出，數則惡寒。風中於衛，呼氣不入，熱過於榮，吸而不出。風傷皮毛，熱傷血肺，風舍於肺，其人則欬，口乾喘滿，咽燥不渴，時唾濁沫，時時振寒。熱之所過，血為之凝滯，畜結癰膿，吐如米粥。始萌可救，膿成則死。

条文解説

この条文は、「膿未成」の腸癰に対する治療を述べている。

一般的に癰は，初期においては赤く，硬く腫れて熱をもち痛む。このときはまだ化膿していない。その後，化膿すると，軟らかくなり腫れはひどくなる。

腸癰も

- ①初期は，腸中において気滯血瘀が生じ，營血が腸中で瘀血となって結して発生する。これに対して正気は鼓舞され，邪正闘争が惹起され，気（脈外の気）・血（絡中の血）が局所に集中し，過剰の気は「熱」と「水」に化し，水と瘀血が互結して硬く腫れる。この時点で腸中に

て赤く・硬く・腫れて熱をもち、痛むため、少腹に腫痞として触れることになる（膿未成）。（ただし、腸中で生じているため、「赤い」「熱をもつ」は確認できない）病変はまだ局所にとどまっている。

②その後、脈外の気（正気）のさらなる集中のため、熱は強くなり、瘀血は血敗して化膿して全身に影響する。

腸癰は、以上①②の2つの段階におおまかに分けられる。

〔「其脈遲」について〕

気血はその時々状況に応じて、均等ではなく、偏在して分布する。脈中の血、脈外の気も同様である。たとえば、激しい運動時、肉中の脈中の血、脈外の気は、約20～30倍、心・肺の気血は約5倍となるが、膈より下の臓腑の気血は、相対的に減少する。

この条文の場合、膈より下の腸中に邪が存在し、邪正闘争が惹起されると、脈中の血・脈外の気は、その局所に集中するため、膈より上の臓および外殻においてはむしろ減少してしまう。そのため遅脈を呈す。（たとえば、腸チフスの初期、発熱のわりに脈は遅いといわれている）

病変が局所から全身に及ぶと、脈は数に転ずる。

〔「脈緊」について〕

水・飲・痰・宿食・寒・痛・腸癰

以上が、『傷寒論』『金匱要略』における緊脈の病証である。

緊脈は、一般的には、邪の存在のために、気（血）が動けない状態のときに生じる。たとえば、寒邪外束（麻黄湯証・大青竜湯証）、あるいは膈間に支飲があり、膈の昇降が不能となった木防己湯証等がある。

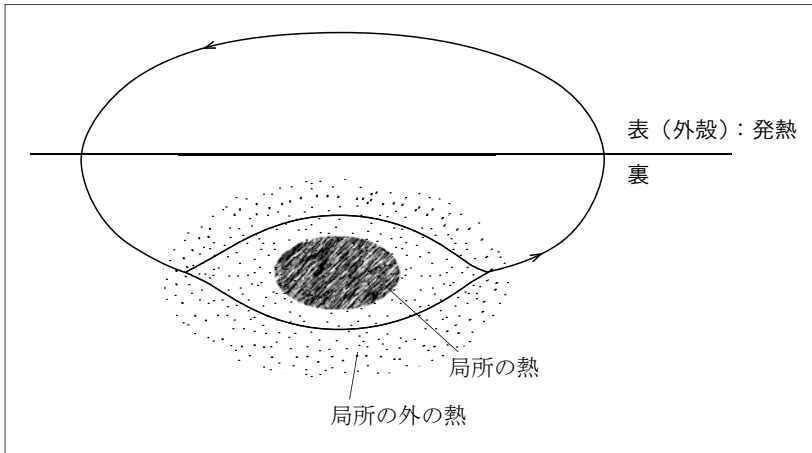
腸癰初期においても、「水」と「血」が互結して腫痞塊を生じ、局所において気血の集中はあるものの、気血は流れず、不通となり、緊脈を呈す。また、絡血の不通は痛みとなり、これも緊脈を呈する原因となる。

〔「自汗出」「復悪寒」について〕

気血が腸中の局所に集中するため、外殻における気血は減少する。そして皮気の減少のために「悪寒」し、腠理が開いて「自汗出」する。

[「時時発熱」について]

腸中の局所が熱をもち、その熱は局所の外にも波及し、そこを巡る血は温められて全身に展開し、発熱となる。



初期においては、裏熱はそれほど盛んではなく、安定していないため、しばしば発熱するが、その熱に軽重が生じる。

[処方解説]

大黄・芒硝で腸中の瘀毒（水血互結したもの）を蕩滌する。牡丹皮・桃仁で駆瘀・活血，冬瓜子は消癰する。以上総合して，清熱破瘀・散結消腫の効果がある。頓用の大黄牡丹湯投与後，下血して治癒する。

「有膿当下」とあるが，条文の「膿已成，不可下也」と矛盾している。「有膿当下」は，おそらく後人の竄入と考える。すでに化膿したあとに攻下を行うと，穿孔の可能性が生じる。したがって，化膿後は，大黄を減量し，銀花・蒲公英・敗醬草等を加えるとよいと考える。

[瓜子]

白瓜子

『本経』味甘，平 主令人悦澤，好顔色，益氣不飢。久服輕身耐老。

『別錄』寒，無毒 主除煩滿不樂，久服寒中。

白冬瓜

『別錄』味甘，微寒 主除小腹水脹，利小便，止渴。

甘瓜子

『別錄』主腹內結聚，破潰膿血，最為腸胃脾內壅要藥。